

## 福音派聖書論の文献と動向

宇 田 進

『若い福音主義者たち』の著者であるリチャード・ケベドーは、カール・ヘンリーの著作『自己同一性をさぐる福音主義者たち』の書評の中で次のように言っている。△今まで福音主義者たちは自己をたやすく定義したものだ。……彼らは、聖書が無誤であると信じていた。なぜなら、聖書は神の靈感された言葉であり、神は偽ることも、自己矛盾を犯すこともできないからと。……しかし、事情はもはやそのようなものではない。若い福音主義者たちの台頭以来……▽。この発言は問題の所在を浮き彫りにするとともに、今日、福音主義が聖書に関してどのようなところに立っているかを示している。これは、数点の訳書で知られているフランシス・シェーファーの言葉であるが、北米福音派の今日の一面をよく伝えているものと言える。いや、これはただに米国のみでなく、実は他の国々の福音派内部の事情でもある。本小論は、そうした聖書論をめぐる福音派内部の最近の状況を、主要な文献と動向の二面から概説するにすぎないが、われわれのこれからの聖書論研究の一資料にでもなれば幸いである。

## 主要な文献

期間的には第二次大戦以後に限定し、論文は問題となったいくつかのみのみ収録する。

- (一) まず、福音的な改革派教会の活動で知られているオランダからみてゆきたい。①英語文献。A. Polman: *The Word of God according to St. Augustine* (1961)。K. Runia: *Karl Barth's Doctrine of Holy Scripture* (1962)。*Christianity Today* 誌一九七〇年十二月四日号と十八日号に掲載された同氏の論文 "What Do Evangelicals Believe about the Bible"。論争の的となつた H. Kuitert: *The Reality of Faith—A Way Between Protestant Orthodoxy and Existentialist Theology* (1968)。S. Greijdanus: *Sola Scriptura: Problems and Principles in Preaching Historical Truth* (1970)。G. Berkouwer: *Holy Scripture* (1975)。*A Half Century of Theology* (1977)。②オランダ神学に関する大作の英訳本を出された H. Ridderbos: *Studies in Scripture and its Authority* (1977)。③オランダ語文献。G. Berkouwer: *De Heilige Schrift* (I, 1966; II, 1967)——前巻の英訳は、十三巻の語である。J. Veehof: *Revelatie en Inspiratie* (1968)——「ヘーグマンの啓示」聖書論の研究。C. Trimp: *Betrouwde Schriftgezag* (『聖書の權威論争』1970)。④オランダ改革派神学における聖書論の状況に関する次の二書は大変参考になる。一つはかつて宣教師としてわが国で奉仕しておられた J. Timmer 師の講義録 *Recent Developments within the Reformed Church in the Netherlands* (1968)。もう一つは C. Van Til: *The New Synthesis Theology of the Netherlands* (1976)——本書は「ルカウワー神学」に関する鋭く批判的である。

- (二) 次に英国で目にする。J. Packer: *Fundamentalism and the World of God* (1958) 邦訳『福音的キリスト教と聖書』、またカール・ヘンリー編 *Christian Faith and Modern Theology* (1964) は収録されている同氏の論文 "British Theology in the Twentieth Century" を参照せよ。近々邦訳を出されたものとして K. Kitchen: *Ancient Orient and Old Testament* (1966)——J. Barr: *Fundamentalism* (1977) の中でキッシン批判を参照せよ。また J. Wenham: *Christ and the Bible* (1972)。F. F. Bruce: *Tradition Old and New* (1974)。D. Baker: *Two Testaments and One Bible* (1976)——旧約と新約との関係に関する近代の諸説を分析評価したものである。V. C. Brown 編 *History, Criticism and Faith* (1976)——キリスト教の歴史性、聖書と歴史の問題に関する編者グループの研究を主体としたもの。最近、新約のキリスト論など精力的に活躍している H. Marshall 編 *New Testament Interpretation—Essays on Principles and Methods* (1977)。あわせて、福音書の証言性と歴史性との関係に関する貴重な研究を命じているオーストラリアの L. Morris: *Studies in the Fourth Gospel* (1969) を引用し加えておきたい。

(三) ドイツと言えば、クリティカルな、そしてリベラルな研究一色という印象を持ちやすいが、昨年邦訳されたチーゴングテンの G. Maier: *Das Ende der historisch-kritischen Methode* (1974) は注目すべき一書である。ヨーロッパ福音派の最近の動向については、本誌九号の牧田吉和師(ボン大学留学中)によるレポートが有益である。

(四) アフリカの福音派からは、またこれといったものは出づらぬが、南アフリカ共和国には福音的な改革派教会が健在している。N. Geldenhuys: *Supreme Authority—The Authority of the Lord, His Apostles and the N.T.* (1953) 及び B. van der Walt (筆者が十五年に訪問したキチンホフスホーム大学のカルビンニズム研究所所長): *Heartbeat—Taking the pulse of our christian theological and philosophical heritage* (1978) の二点を記しておく。

(四) 戦後、聖書論に関してもっとも多くの文書をあらわしているのは、なんともいっても北米の福音派である。四年前に出た注目されている *The Uses of Scripture in Recent Theology* の著者 D. Kelsey (ハーバード大学神学部

教授) は、ウォーフィールド、バルス、ライト、バルト、ソントン、テイリップ、ブヤトマンの聖書論を比較しながら、ウォーフィールドを十全言語靈感説の代表的論者と呼んでいるが(一五頁)、そのウォーフィールドの *The Inspiration and Authority of the Bible* (邦訳あり) が一九四八年に再版された。これは長い間福音派聖書論のいわば標準版とみられてきた。

五〇年代のもの。F. Pieper: *Christian Dogmatics, I* (1950) ——ルターの聖書論を詳述。N. Stonehouse, P. Woolley 共編 *The Infallible Word* (1953) ——ウエスチンスタール神学校のマーレー、ヤング、ストーンハウス、キルトン、ウーリー、カイン、ヴァン・テイルによる聖書論シンポジウム。W. Arndt: *Does the Bible Contradict Itself?* (1955)° R. Preus: *The Inspiration of Scripture — A Study of the Theology of the Seventeenth Century Lutheran Dogmatists* (1955) ——十七世紀プロテスタント正統主義の聖書論はよく批判の的とされるが(たゞえば渡辺善太『聖書論』七八頁以下参照)、プルウスは綿密な分析に基づいてその真相を伝えてくれる。J. Walvoord 編 *Inspiration and Interpretation* (1957) ——米国福音主義神学会の集の「ついで」ペイン、カー、ウェローラー、カントナー、ターナー、ハリス、アンガー、ジエヒット、カーネール、ヘンリーによる貴重な論文がおちめられている。L. Harris: *Inspiration and Canonicity of the Bible — A Historical and Exegetical Study* (1957)° E. Young: *Thy Word is Truth* (1957)° C. Henry 編 *Revelation and the Bible* (1958) ——本書は、アメリカ人だけでなく、英国のブルース、バック、ワイズマン、ステインズ、ケネディ、スティーブソン、マーチン、オランダのヘルカウワー、両リダボス、フランスのマルセル、南アのヘルデンホイスなども執筆しているもので、うってつけは

この時期における福音派聖書論の集大成といえよう(ついで十五篇は『聖書論叢集』に収録されている)。B. Ramm: *The Witness of the Spirit — An Essay on the Contemporary Relevance of the Internal Witness of the Holy Spirit* (1959)°

六〇年代のもの。J. Murray: *Calvin on Scripture and Divine Sovereignty* (1960)° G. Clark: *Religion, Reason, Revelation* (1961)° B. Ramm: *Special Revelation and the Word of God* (1961)° C. Van Til: *The Doctrine of Scripture* (1967)° G. Ladd: *New Testament and Criticism* (1967)° J. Rogers: *Scripture in the Westminster Confession* (1967)° J. Montgomery: *Crisis in Lutheran Theology, I, II* (1967)° M. Tenney 編 *The Bible — Living Word of Revelation* (1968) ——一部は前掲の『聖書論叢集』に収録されている。A. de Graaff・C. Seerveld: *Understanding the Scripture* (1968)°

七〇年代にはいると、聖書論が北米福音派内部における中心的な問題の一つであることが明らかになってくる。その事情を裏付けるために、七二年には Christian Reformed Church 中の *The Nature and Extent of Biblical Authority* が、そして福音的な改革派・長老派の国際的組織である Reformed Ecumenical Synod のカンファレンス・ペーパー集 *Scripture and its Authority* がそれぞれ出版された。また、同年には、聖書の權威の性格を古代近東の『宗主契約』の光に照らして説明した M. Kline: *The Structure of Biblical Authority* が登場した。後半の七六年には論争の火つけ役となった H. Lindvall: *The Battle for the Bible* が出版された。

そのほか七〇年代に出たものをみてみると、ウォーフィールドの立場を固守するか、あるいはそれを発展させようとするもの、もう一つはウォーフィールドの立場を批判しつつ、より現代的な福音主義聖書観を形成しようとするものとの二つの流れが判然としてきていることに気がかされる。前者に属するものは、C. Pinnock: *Biblical Foun-*

ation—The Foundation of Christian Theology (1971) J. Skilton 編 Scripture and Confession (1973) H. Downs: Power-Word and Text-Word in Recent Reformed Thought (1974)——オランダのキリスト教哲学者 K. マン・ライヴェルトの立場をめぐる研究 J. Montgomery 編 God's Inerrant Word (1974) J. Boice 編 The Foundation of Biblical Authority (1978)——七七年に結成された「聖書の無誤性に関する国際協議会」が昨年ミカド会議を開いた際の講演集などがある。一方、後者を属するものとして、D. Beegle: Scripture, Tradition, Infallibility (1973) H. Boer: Above the Battle—The Bible and Its Critics. (1973) P. Jewett: Man as Male and Female (1975) J. Rogers 編 Biblical Authority——ヘーム・ロジャーズ、ジョン・ク（彼は以前の立場を変えた）、マイケルセン、ラム、ンムーなどの論文を収録 J. Vander Stelt: Philosophy and Scripture——A Study in Old Princeton and Westminster Theology (1978) などがある。

(六) わが国の福音派系の文献として概略次ものをリストさせて置く。JPC 篇『現代と聖書信仰』(一九五九) 宇田進編『現代における聖書』(一九六七)、『新聖書注解』の各関係論文、榎原康夫氏『旧約聖書の生い立ちと成立』(一九七一)、『新約聖書の生い立ちと成立』(一九七八)、改革派西部中会文書委員会刊『聖書論』(一九七三)、服部嘉明『Johann Keil の旧約聖書観』、『神学と人文』(一九七四)。

### 最近の動向と問題点

まず、今日までの福音派聖書観の主流をなすものはどのようなものであったか。これをキリスト論になぞらえて大局的に言い表わすと、今日の編集集的方法によって代表されるアリウスの聖書観(聖書の神的起源や神言性を軽視も

しくは否定する立場)と、極端なファンダメンタリズムの仮現說的聖書観(聖書の時代性や人言性を十分考慮しない立場)の両極端をさげつつ、聖書の生成における神的要因と人的要因との有機的同流もしくは連合活動(ウォーフィールド前掲書邦訳一六二頁)を中軸とするアタナシウスの中道のそれであったと言えよう。しかしながら、今日、まさにその「有機的同流」や「連合活動」の理解をめぐって以下に記すような種々論議がまき起っている。

(一) 福音派内部における今日の論議の多くは、ウォーフィールドの立場をめぐって展開されていると言える。そのことを象徴的に示しているのが、六七年の十二月、カナダのトロント市で開かれた福音主義神学会の年次総会に続く研究会の席で発表された D. Fuller (フラー神学校教授): "B. B. Warfield's View of Faith and History—A Critique in the Light of the N.T.であるが、ロジャーズ、ルーニア、メルカウワー、リダボスなどによる主張の中にも同じような傾向を見出すことができる。

(二) 最近の批判的論議は、大局的にいつて、次の二つの触発的契機をその背景に持っている。一つは近代の聖書学的研究であり、もう一つは近代神学、ことに一九二〇年代以後に発展したバルト神学である。両者との接触ならびに討論が、最近の新しい動向や展開に大きな役割をはたしている。前者の例としては英国のブルースを、そして後者の例としてオランダのメルカウワーをあげることができる。当然のこととして、聖書学的研究とバルト神学をどう評価するかということが問題とならざるを得ない。①近代の聖書批評学について、たとえば、キッチンは前掲書の中で、進化論的発達史観に立つ歴史的文献学的方法は今日の古代近東の諸研究によって支持しがたいものとなっていることを力説している。また、近代の歴史的研究に多大の影響をおよぼしたトレルチの歴史的方法の根底にひそむ誤った前提」といった問題も、パネンベルクなどによって指摘されている(Grundfragen Systematischer Theologie, 1967)。よく知られているように、トレルチは彼の論文 "Ueber historische und dogmatische Methode" の中で、「批判」

「類比」、「相関関係」を歴史的方法の三原則としてあげた。その結果、キリストの神性や復活など、いわゆる聖書の超越的、超自然的要素はみな否定されるということになってしまったわけである。これに対し、パネンベルクは、このようなトレルチの考え方の根底には、歴史的方法が本質的構造的に人間中心的世界観と一つでなければならぬといった「誤った前提」がひそんでいることを指摘し、それを清算しないかぎり歴史的方法はただ破壊的になるばかりであると批判している。そして、たとえば「類比」につきまとう人間中心的性格は、必ずしも世界観としての人間中心主義ではなく、単に方法論上の人間中心主義にすぎないとみ、両者の混同をさげるときに、神的歴史と人間の歴史の分裂は起こらないし、歴史的方法はあらかじめ超越的現実を歴史からしめだしてしまう必要もなくなる、と論じている。ブルトマンの場合にも、すでにヤスパースが指摘したように「閉じられた世界」という古いドグマを持っているし、今日の「科学的思考」を基準化し、聖書中のそれと相容れないものを「神話的思考」ときめつけて、それらを非神話化し、特定の実存論に還元するという一種のドグマティズムを示している。以上、前提に関する実例をあげたわけであるが、スタントンの論文“Presuppositions in New Testament Criticism”も、前提にからみつく偏見やいわゆる前理解の問題をとりあげ、一つの理解方向を示している。で、こうした前提問題を見るにつけ、ヴァン・ティルやドイヴェルトが終始指摘しているように、それらのうちにひそむ「自律的理性のドグマ」の吟味の必要をあらためて感じさせられる。とともに、ヤングの前掲書に見るように、福音的な改革派神学によって強調されてきた「福音の前提としてのキリスト教有神論」の主張の意味するところが、聖書論との関係においてももっとと掘り下げられなければならないように思う(『改革派神学』第十号の岡田稔論文参照)。②バルト神学との対話からもっと多く影響された福音派の代表的神学者は、なんとといってもヘルカウワーであろう。特に彼の聖書論に対する影響については、『聖書の教理』や『確かなる希望』の訳書で知られている H. Berkhof の論文“De methode van Berkouwers theologie”, *Ex Auditu Verbi* (1965) や、オランダ神学に関するヴァン・ティルの前掲書が有益な分析を提供してくれている。そこで指摘されていることは、ヘルカウワー聖書論に見られる変化の三段階ということである。第一段階は、三九年に出版された *Het Problem der Schriftkritiek* (『聖書批評の問題』) に代表される段階で、それはパービンク流の改革派神学に立ちつつ、聖書の絶対権威を強調した時期である。特に、本書の中で、近代の聖書批評は啓示の相対化を招来しつつあることを警告しながら、そのような相対主義への転落を、①ヘルマンの「内的イエスの生」のようなユニークな宗教経験に訴えることによって、②ケーラーのように、聖書を歴史とは関係のない信仰の証言文書とみなし、それをおして出会うケリケグマのキリスト(史的イエスとは区別された)に訴えることによって、③バルトのようにキルケゴール的な逆説の概念を持ち出すことによって、防衛とする近代神学者たちの試みは、結局、神の啓示の客観的実在性をなしくずしにするものであるとしてきびしく批判した。第二段階は『教義学研究双書』が出はじめた四九年以後で、かつてのような自由主義神学の主観化批判や、バルト神学に対するボレミックをひっこめ、かわって自己の属する改革派陣営内の「主知主義」や「思弁的傾向」を批判しはじめながら、今度は聖書の権威そのものではなく、その「性格」を重視するようになる時期である。つまり、聖書中の「人格的關係を生み出すところの救済的部分の権威性」の考究が、彼の聖書論の中心的関心事となる時期である。第三段階は最近のことである。聖書の「実存的性格」をとみに強調する時期である。この時期にはいると、それ以前から少しずつ浮上しつつあった彼の「信仰との相関関係」の原理が一層徹底化され、第一段階で見られたような客観的な聖書の権威主張(二六一年にアッセンで開かれたオランダ改革派教会の大会で確認された立場)が姿を消すようになる。以上のような変化を、バルト主義に立つベルコフは神学上の発展的成熟とみているが、バルト神学に批判的なヴァン・ティルは歴史的改革派神学からの不幸な逸脱とみている。このベルカウワーのケースは、われわれに多くの問題提起をなしている

言えよう。

③ 今までの福音派の神学は、フィンレーソンの論文でも明らかのように、現代のリベラルな神学における『不当なアンチテーゼ』を批判してきた。つまり、実存主義や人格主義の影響を強く受けている現代神学の啓示論や聖書論において、①聖書と神の啓示との区別、②命題の真理伝達と実存的な出会いとの対立、③聖書テキストと神の言葉との峻別、が与えているしく目立っている。そして、逆説、決断、信仰の飛躍、ブーバーの「我とそれ」と「我と汝」の区別、Geschichte もしくは Geschillichkeit と Historie の区別などが強調されすぎた一種の『出来事的神秘主義』に傾く傾向を批判してきた。この点に関する代表的なものとしては、C. Van Til: *The New Modernism—An Appraisal of the Theology of Barth and Brunner* (1947) P. Jewett: *Emil Brunner's Concept of Revelation* (1954) C. Trimp: *On de Oeconomie van het Welbehagen—Een analyse van de idee der 'Heilsgeschiede'* (1954) C. Trimp: *On de Oeconomie van het Welbehagen—Een analyse van de idee der 'Heilsgeschiede'* (1954) *Geschillichkeit* (1965) の中で、福音的改革派神学の立場から『実存史』の批判を試みた。ところが、最近では、福音派の一部の中に、以上の批判を妥当としながらも、ウォーフィールド的聖書論においては、逆に聖書論の主要問題である靈感、権威、無謬性、無誤性が啓示論から切り離されすぎた形で考究されてきた疑いがあるという意見が強くなってきている。ルーニアやヘルカウワーの主張がそれを代表しているものと言える。靈感等個々の点はのちにとりあげるが、ここで神の啓示をどうとらえるかが、聖書論に決定的影響を及ぼすという点を記しておきたい。あわせて、神の啓示とその所産としての聖書との密接な関係に関する理解や、聖書が神の啓示に関する唯一の靈感された証言であるという啓示論においてしめる聖書の位置についての理解が、ラムの研究などを活用しながら一層深められなければならないことを付記しておきたい。

④ 福音的聖書観は、アプローチという点から見ると、聖書自身の自己証言を第一義的な手がかり、また決め手として尊ぶ立場であると言える。ステイブスの論文は、法廷における証言の権利や、他人の真相認識の場合などを例証として用いながら自己証言の位置づけ(循環論法という非難に対する答えでもある)を行なっている。ラムは特別啓示に関する前掲書の中で、聖書の誕生を神の語りかけ(聖書においてこの神の語りかけと神の行為が神の啓示活動の二大拠点とみられる)という啓示様式の延長・拡大にほかならぬと論じながら、この主の語りかけに対してわれわれがとるべき基本的姿勢は、「しもべ聞く」のそれだなければならないと主張している。また、ヤングは前掲書の中で、ヨブ記九・三二、三三に基づいて次のように言っている。ここでヨブの言わんとすることは、①もし神が創造者かつ知識の源であり、われわれ人間は被造物であるならば、人間がその神が啓示された事柄の審判者になり得る道はないということであり、②神と人間の両者の上に立って正誤の判定をくだすような第三者としての審判者もしくは仲裁者というようなものは存在しないということ、つまり、人間は神におもむくことができるのみなのである、ということである。ところが、今日ではまさにヨブが否定している審判者(いろいろな名称で登場するが、結局は人間理性の創造物である)を立て、聖書その判定もしくは仲裁に服せしめるところのいわゆる『仲裁者の神学』が流行のようになっているところに方法上重大な問題がある、とヤングは論じている。さて、聖書の自己証言を聖書観構成の決め手とする以上のような立場は、広く福音派内部において受け入れられているが、最近、その自己証言の解釈に一つの限定を付そうとする動きが出てきている。その一例がフラーの主張である。彼によると、たとえばマタイ五・一八、ヨハネ一〇・三三、テモテ第二の三・一六、一七など、聖書観に関する「教理的章句」は、「啓示的知識」(revelational knowledge)の無誤性を教えるもしくは含蓄している。したがって、ウォーフィールドのように生物学、世界像、

歴史、氣象学等のいわゆる「非啓示的知識」の無誤性までも教えているとするのは拡大解釈であるとみなされる。そして、以上のように、無誤性を啓示的、救済的な事柄もしくは部分にだけ限定すれば、歴史的文獻的研究が提出するいわゆる「聖書の現象」にまつわる聖書中の矛盾や誤りというもののほとんどが非啓示的、非救済的部分に関するものであるゆえ、それらが「教理的章句」に対するわれわれの信頼や、個人の信仰そのもの（信仰にとって重要なこととのほとんど、たとえば、神は愛であるとか、キリストは罪人のために死なれた、などは非啓示的叙述以外の部分、すなわち啓示的部分の中に見出されるとフラァーは主張している）をアップセットする可能性は、ウォーフフィールドの場合よりもはるかに少ない、とフラァーは考える。このようなフラァーの修正意見の背景には、トレルチの歴史的方法や、キェルケゴールによる信仰の根拠に関する実存的な理解などによって提起された啓示と歴史、信仰と歴史に関する近代の問題意識の影響があったと思われる（バーゼル大学へ提出した博士論文をもとにしてあらわした彼の *Easter Faith and History*, 1965 参照）。だがしかし、彼が言うように「教理的章句」をより厳密にみることは当然であるとしても、はたして「教理的章句」に対する彼の解釈は正しいか、また、啓示的と非啓示的の分割、救済的と非救済的の区分けは彼が主張するほどはたして容易なものか、といった問題も今日あらためて問い直されている。

(五) 聖書の自己証言の調査から明らかとなる中心的なことが靈感の事実である。「靈感とは、通常、神の御霊によって聖書記者に与えられた超自然的影響であり、それによって彼らの著書が神的な真実性を与えられるもの、と定義される」(ウォーフフィールド邦訳一一二頁)。とともに、テモテ第二、三・一六の *Treasures* について、その根本的意味は、「聖書が人神によって吹きこまれ $\vee$ ているとか、聖書がその人間的著作者の中への神的な $\wedge$ 吹きこみ $\vee$  (Breathing) の所産である、とかいうことではなく、聖書は、神によって吹き出された……神の創造的息の所産だ、と

いうことである」、といったウォーフフィールドの印象的な説明は長い間福音派世界の中で尊重されてきた。さらに、靈感の性格については、①聖霊は、聖書記者たちの人格、氣質、賜物、教養、文化、置かれていた歴史的環境等を媒介として用いた、②聖書記者たちはただ受身ではなく積極的能動的に活動した(たとえば、ルカ一・一一四、サムエル、列王、歴代に見られるような諸資料の調査と使用や、特定の歴史的状况、生活の境位への対応など)、等の理解に基づいて、いわゆる機械説ではなく有機説が説かれた。また、靈感の範囲については、「全聖書が、そのあらゆる部分、あらゆる要素において最も小さな細目に至るまで、教えの本質におけると同様、表現の形式」(前掲書一四四頁)に至るまで、換言すれば、「神秘的なものはもちろん、また理性で発見できる事柄も、信仰と生活はもちろん、また歴史と科学の問題も、思想はもちろん、また言語も、靈感されている」(同八三頁)、という「十全言語靈感」の立場が説かれた。しかしながら、靈感に関する以上のような伝統説に対し、最近、多くの批判的意見が出てきている。①まず、歴史的な面からの論議がある。ウォーフフィールドによると、聖書の十全言語靈感ならびに全無誤性の立場は「教会教理」であったとされる。つまり、今までつねに歴史的教会の立場であって、それは公式信条となつていられる。今日でもハリス、ペイン、ガースナー、モントゴメリー、カンツァー、ターナー、ミューラーなど多くの福音派の学者はこの理解を支持している。これに対し、ロジャーズ、ベルカウワー、プロミリーなどは批判的立場を表明している。この批判的評価がもっとも顕著な形で現われるのは、十七世紀プロテスタント正統主義の聖書論の評価においてである。たとえば、プロミリーは、それが本質的には宗教改革者たちの立場を継承しているものであることを認めつつも次のように言っている。彼らルター派や改革派の教義学者たちの全体にわたる綿密な成文化が、実はある強調点の転移を生じさせたのではないか。それ自体は小さい変化だが、のちに重大な歴史的结果をもたらすことになったのではないかという疑問を起させると述べたあと、以下の問題点をあげている。第一に、神が著者であると

いう面が聖書記者たちの参与を圧倒してしまっている。たしかに、機械説をさけつつも、口述筆記への傾向が見受けられる。第二に、本質的には正しい言語靈感の教理を不必要に極端まで押し進める傾向が見受けられる(たとえばヘブル語母音記号の靈感の主張など)。第三に、聖書の靈感はあたかも究極的にはあらゆる細部に至るまで正確であることが証明できるかどうかにかかっているかのようになり、無誤性を誤った方向で重視する傾向が認められる。そして、聖書の無誤性に対する攻撃に対処する際に、無誤性が靈感の基礎であるかのような関係の逆転さえも見受けられる。第四に、結果として、聖書の内的証明を中心とせずに、むしろ聖書の真正性や權威に関する外的・内的基準のほうを重要視する傾向が生じてきた。つまり、合理主義的なアプローチのある護歩が、純粹に聖書の資料をそれとは異質のアリストテレス的、あるいは、デカルト的原理に従属させる傾向が見受けられる。以上がプロシリーの指摘である。一方、ベルカウワーによると、この時期に次のような方向での聖書の概念化が進められたとして、その方向を批判している。一、聖霊はまず聖書記者たちに書くべき事項を示した (*suggestio rerum*)。二、聖霊は彼らにそれらの事項を表現する言葉の選択をうながした (*suggestio verborum*)。三、聖霊はそれらの言葉を書き記させた (*impulsus ad scribendum*)。四、聖霊は特別な摂理的働きをもつて聖書本文と聖書正典を保護保存された (*providentia Dei circa canonem*)。ベルカウワーによると、このような形で進められた靈感の理論化は、靈感を聖書全体に均等、均質なこととみなすようにしむけるとともに、次第に靈感を口述筆記以外のことは考えさせなくしてしまうようになり、ついにはいわゆる機械靈感説までも発生させてしまうことになったと言われる。同様の批判は、K. Barth: *Kirchliche Dogmatik* 第一巻第二分冊三章十九節二項の中で示されていることは多くの知るところであろう。そして、ウォーフィールドの見解も、たしかに機械説ではないが、以上のような靈感の形式主義化、均質化の影響を強く受けたものであると批判している。ベルカウワー自身は靈感を階層的、発展過程的性格のものと理解している。ロジ

ヤーズの批判論の行き過ぎについてはガースナーなどによって指摘されているが、この一七世紀正統主義の聖書論の評価はまだ言いつくされたとは言いがたいように感じられる。また、福音派内部のこととして、本問題に関するブルウスの注意深い研究(前掲書)、バルトの影響、トレティーニと深い関係にあるC・ホッジの神学についてどれだけ研究されてきただろうかと考えさせられる。②最近の論議の中でより明らかになってきた一つことは、福音派の中に靈感のとらえ方について二つの流れがあるということである。一つは前述のホッジやウォーフィールドなどによって代表される古プリンストン神学の流れで、この立場において靈感のねらいは信頼できる、真理を伝えることにあると解せられている。もう一つはオマ(*Revelation and Inspiration*, 1910)によって代表される流れで、この立場においては、真の知識の伝達ということよりも、「キリストにある生命を伝える力」が靈感の目的であると解せられている。両者の違いはあくまでも強調の違いであって、いずれの立場をとるにせよ、聖書はわれわれにイエス・キリストへの道を明らかに示すものであるという根本的確信におおむね一致している(E. Carnell: *The Case for Orthodox Theology*, 1959 参照)。とはいえ、両者の違いは、構築するそれぞれの聖書観に無視し得ない特色を与えていることは、最近の論議の中からも知ることができる。③靈感は、聖書記者たちが用いたいろいろな資料の中に存在した誤りや不備を正すものと見るべきか。前述したオマのような理解に立って考える場合には靈感の目的はキリストにある生命を伝達することであり、この目的は聖書が聖書記者たちの用いた資料を訂正するしないにかかわらず達成されると主張される。たとえば、靈感された歴代誌は、セム人たちの誤りない歴史を提供することではなく、むしろ読むわれわれに知恵を与えて救いを受けさせることを目的とするものである。そのような神のみ旨は、使用された資料中にひそむる程度の不正確さに関係なく実現されるとされる(たとえば歴代I 18・4—サムII 8・4、歴代I 19・6—サムII 10・6、歴代I 19・18—サムII 10・18、歴代I 21・5—サムII 24・9、歴代I 21・25—サムII 24・24、歴代II 9・25—列王I

4・26、歴代Ⅱ3・4―列王Ⅰ6・2、歴代Ⅱ4・5―列王Ⅰ7・26など比較参照)。リダボスも靈感を何らかの意味で「聖書記者たちの神格化」ととることに反対している。靈感とは、聖書記者たちを彼らがおかれていた知識、記憶、言語、表現能力等における制約や制限から解放したり、そうした限界を超越させるということではない、と彼は主張している。④従来、靈感は聖書原典の起源にまつわる過去の一回的な行為、聖書の文書化 (graphical inspiration) に限定して考えられてきた。ルーニアはこれを靈感の「オンティック」(ontic) な面と呼び重視するのであるが、同時に「靈感の『ダイナミック』(dynamic) な面を強調している。彼は『バルトやバービンの研究』(Gereformeerde Dogmatiek, I, 1906, 二章十三節) を参照しながら、テモテⅡ3・16のセオプ・ニューストスが聖書の一回的な神聖的起源を示すものだけではなく、「聖書を保ち、生かし、そしてその内容をあらゆる仕方で人類に、彼らの心と良心にとどける」(バービック) ところの聖霊の永続的な働きが聖書に与えられていることをも意味するものであると述べている。そして、ウェストミンスター信仰告白一・一〇にある「the Holy Spirit speaking in the Scriptures」という表現は、まさにこの点を言っているものである、とルーニアは考える。このようならえ方は、靈感を神の啓示の働きと密着させて理解すべきであるという彼の基本的立場をよく物語っていると云える。

(4) 聖書の靈感は無謬性を必然的に内包しており、両者は本質的に結合している。この立場が福音的聖書観の基本的理解である。だが今日、まさにこの無謬性問題に議論が集中している感がある。①まず、今まで一般に広く使われてきたこの「無謬性」という用語に一言ふれておかなくてはならない。英語圏の教会では「infallibility」の「inerrancy」の二つの表現が使われてきた。基本的な意味として、前者は人を誤り導かない、人を欺くことがないという資質の意味し、後者は事実誤りが無い、誤謬から自由であるという資質を意味する。今までわれわれの間では「両者とも普通通無謬性」と表現されてきた。しかし、最近の論議を見ていると、両者を使い分けることが必要になってきているように思う。なぜなら、インエランシー抜きインファリビリテイの主張が目立ってきているからである。たとえば、一部の福音派の中に、「福音それ自体と、聖書の霊的内実は、聖書のインエランシーに立たなくても確保できる」、「キリストは、誤りない聖書という立場に立たなくても十分宣べ伝えられる」、「ウォーフィールドのように聖書の細目にまで及ぶトータルな真正性の立場をとらなくても、聖書のインファリビリテイ(信頼性)を主張できる」、「聖書の無誤性抜きで聖書の権威は確保できる」、といった主張が目立つようになってきている。②今日はある神学用語を使うということだけでは何の保証も得られない時代である。すなわち、どのような意味で使っているかをたしかめた上でないと話にならない場合が多い。この無謬性とか無誤性もまさにその好例の一つと言えよう。たとえば、ヘルカウワーは、不正確さという意味での誤りということと、罪や虚偽という意味での誤りとをはっきり区別すべきであると主張して、ウォーフィールドの誤りのとらえ方は形式主義化したものであると批判している。ルーニアは、ウォーフィールドの権威概念や無謬性理解は、啓示論の光に照らしてもっと厳密に規定されるべきであると主張している。「聖書の神的権威の性格を問うにあたり、唯一の答えは、△啓示的権威△である。啓示の概念から出発して論を進めてきた理由もここにあるが、他の権威の概念をここに持ち込むことは、全く正しくない。たとえば聖書に科学的権威を帰したとしよう。これは一部の根本主義者の誤りである。……たとえば、H・M・モリスは『聖書と科学』の中で、△聖書は第一義的に科学の書ではないが、近代の科学的真理を数多く含んでおり、いかなる科学的誤謬もない。……現代的視点を示しているところが数多くあって、しかもそれが、あまりにも現代的であって、神の啓示であるということ抜きにしては、説明不可能と見えるほどである△と言っている。また、モリスは……特に伝道の書一・七の言葉をあげて、三千年近くも前に、すでに、この現代の知識が、神によって啓示されているとも言っている。わたしの意見では、モリスは全く間違ったアプローチをとっている。モリスの場合、聖書の権威は聖書自身

の性格・射程・目的から切り離されてしまっている。だが、聖書は科学的データを与えることではない。聖書の目的はただひとつ——神に対する信仰、イエス・キリストにおける神の救いへと、わたしたちを、聖霊の力を通して導くことである」(『福音主義神学』二号、一九七二、三三—三四頁)。同様に聖書の無謬性は啓示的無謬性であることを指摘しながら次のように言っている。「聖書は、あらゆる点で無謬であるか？ 然り。しかし、このことは、啓示の実際の過程という文脈の中で考察されねばならない。啓示はつねに△下降∨の事柄である。……啓示において、神はある時代の人々に語るにあたって、その時代に住んでいるある人々を用いた。彼らの思考形式、彼らの表現形式、その時代の文化類型をくまなく用いた。この意味で、聖書は、はじめから終わりまで、セム的な書物であると言ふことができよう。……したがって、わたしたちの現代的・科学的視点をもって聖書に近づき、その視点から聖書を判断することは、原理的に間違っている。たとえば、歴史の書き方にしても、現代のわたしたちの手法とは異なる。聖書は、概数しか語らぬことが多いし、ことがらについても詳述せぬことが多い。資料配列にあたってもひじょうに体系的・図式的である」と(同三五—三六頁)。

③以上のような主張は、具体的には、聖書の人間性(メンシュリヒカイト)、僕の形態(クネヒトゲシュタルト)、時代的制約性の理解問題であると言える。今日、特に前面に出てきている問題は次の四点にしろることができる。第一は、古代の世界像および人間観の問題である。たとえば、出エジプト二〇・四に見られる三階建の世界像があげられる(サムエルII 22・8、ヨブ26・5、詩24・2、46・3、136・6、148・4参照)。この数の問題は、すでにブルトマンの非神話化論との関連で多く論じられてきた点であるが、本問題を空間的要素を中心にして思考する古代人の“the biotic world view”という面から一つの興味深い解決を試みていゝる F. Kuiper: *Geloof en Wereldbeeld* (『信仰と世界像』) 1956 は記憶されてよいだろう。第二は、独自の歴史観、歴史記述の問題である。つまり、聖書に見る歴史は、近代のもののように一般的普遍性の立場から書かれたもの

ではなく、独自の視点、目的、正確さを有する信仰的歴史であるという点である。ルーニアは、バルトの「口碑」(ザーゲ)と「伝説」(レグンデ)を内容とする「ゲシヒテ」(ヒストリエ)から区別される」というとらえ方を不十分とし、“prophetic historiography”としてとらえようとしている(もちろん、リアルな歴史であるという基本に立ちつつ)。第三は、聖書がセム的な社会的習慣や文化的類型に基づいて書かれているという点である(たとえば、モーセの諸律法、パウロの婦人観、奴隷制の問題など)。第四は、聖書中のいわゆる矛盾、誤りの問題である。だが、この点については、誰が、何を規準にし、どのような方法で矛盾とか誤りと判定するかという困難な問題がある。また、本当に矛盾とか誤りがあるのかどうかという点も慎重に検討しなくてはならない。④こうしたさまざまな論議がなされる中で、一九七七年に「聖書の無謬性に関する国際協議会」が米国内でうぶ声をあげ、昨年シカゴで研究会を開き、「シカゴ声明」なる文章を公にしたことも記憶されてよいであろう。幾分かの修正をほどこしつつも、基本的にはウォーフィールドの立場が尊重されていることは次の文章から知られよう。「聖書は権威をもってイエス・キリストを証しする靈感された神のことばとして、“無謬”であり、“無誤”である。……しかしながら、神に教えられた聖書記者たちが一つ一つの章句で何を主張しているかを決定するにあたっては、それが人間の作であると主張されていることについて、また、そのことの性格について、もっとも綿密な注意を払わなければならない。……歴史は歴史として、詩は詩として、誇張法や隠喩はそのようなものとして、概説や概数はそのようなものとして、取り扱わなければならない。……聖書の時代の文学上の慣習と、私たちの時代のそれとの違いも考慮されなければならない。たとえば、年代順によらない叙述や、精密でない引用は慣習的なものであって、当時の人々が認めていたことである。……聖書が無誤であるというのは、現代的な基準に照らして絶対的に正確であるという意味においては、その主張を有効なものとし、かつ聖書記者たちが目指した真理性の度合いを満たしているという意味においてであ

る。……聖書の信頼性は、文字や綴り字上の変則、自然界に関する現象的な記述、虚偽の言葉の報知（たとえば、サタンの虚言）、あるいは、二つの章句間の外見上の食い違いによって、否定されることがない」。

(七) われわれが聖書は無謬の真理であることと、その神的權威とを十分に納得しかつ確信するのは、歴史的教会と聖書自身が示している多くの完全性の証拠もさることながら、「みことばによって、またみことばとともに、われわれの心の中で証言したもう聖霊の内的みわざによる」(ウエストミンスター信仰告白一・五)。これが一般に「聖霊の内的証明」と呼ばれているものである。ところで、近年の論議をたどってみると、この点をめぐって二つの流れがあることに気づかされる。一つはコンクルーシブなこととして聖霊の内的証明を強調するオランダ学派であり、もう一つは、聖霊の内的証明は、あらゆる外的な証拠をとおして、人々のうちに確信を与える、と考える古プリンストン学派である(ウォーフィールド前掲書二三四、二四一頁)。後者の場合のように、聖霊の働きという内的実存的な面と、証拠という外的客観的な面の双方を結びつつ展開しようとする考え方は、主観と客観の符合、外的と内的の一致を強調するスコットランドの二元的実在論(dualistic realism)の対応説的立場(correspondence theory)に強く影響された立場である。これに対して、前者は fideistic な性格が強いと言える。この立場について、実存的な宗教経験はしばしば確固たる基盤とはなり得ない。なぜなら、聖霊の内的証明にしても、保守的なカルビニストには聖書全体の無謬性の確信を与えるものと解せられるかと思うと、バルト主義者たちには聖書のキリスト論的部分に対する確信を与えるもの、とそれぞれ違った仕方であられるからである、とピノックは主張しながら、外的証拠を重視している。

以上、福音派聖書論に関する最近の動向を概説したわけであるが、今日明らかなことは、検討さるべき点が多いということ、そして「学際的」(インターディシプリナリー)立場から、すなわち、組織神学の面からだけというのではなく、神学諸科全体の総力を傾けて聖書論に関する総合的な検討、研究が必要となってきたということではなからうか。

(日本基督神学校教授)